

高校生の『社会福祉実習入門』講座の受け入れにおける現状と課題

青柳美秀子¹⁾ 一柳陽子¹⁾

要 旨

本学では A 高等学校の「社会福祉実習入門」を選択した生徒を受け入れ指導している。本学の看護学担当教員が、8 月に 4 日間、看護実習室及び教材等を使用し、講義及び演習という形態で学習を支援している。平成 17 年～20 年の実施状況と生徒の感想から、看護の学習を通して介護の基礎となる技術を学んでいる現状と課題を報告する。

生徒はさまざまな疑似体験や看護技術の体験から苦痛や不自由さを実感し、相手のおかれている状況を理解している。その人の立場に立つことは援助する上で重要な、援助を受ける人との対等性を理解する基盤になると言える。援助するための技術の学習では、介護の核である生活の質・生活の維持という観点から社会福祉施設での実習体験がより学習を深めると考える。

キーワード：介護、介護技術、看護技術、日常生活行動

I . はじめに

本学では A 高校における選択科目『社会福祉実習入門』を選択した生徒を受け入れ、「高齢者への総合的な介護活動が実践できるための基礎的な知識と技術を修得する」ことを目標に看護および看護技術の学習の場を提供している。この科目は A 高校の夏休み期間の 4 日間、本学における各看護領域の講義や実技の一部を学習し、その後 1 日間、社会福祉施設での現場実習を行うプログラムである。本学での学習を終了した生徒の感想からは「相手の立場になること」の大切さを実感したことや看護の技術を、最終日に行う社会福祉施設の現場で活用するため目的意識を持って学習するという意欲も表現されている。

平成 17 年度から平成 20 年度の 4 年間の、各看護領域の教員が指導するという形態をとり入れた指導の概要と平成 20 年度受講した生徒の感想を検討し、『社会福祉実習入門』を学ぶ生徒にとって、本学において看護と看護技術を学習する意義と効果的な学習のための課題について考察したので報告する。

II . 取り組みの経緯と実際

1. A 高校の概要

フレキシブルスクール / 公立の単位制普通科 (全・定)

「自ら課題を見つけ、自ら学び、考え、問題を解決

する資質・能力」を育て「個性の伸張をはかりつつ、自己の可能性を開拓していく」ための教育を行う。(学校説明資料)

2. 『社会福祉実習入門』の目的

全日程 6 日間

4 日間は校外で授業・1 日施設実習

様々な援助技術や介護は対人サービスであり高齢者や障害者と関わりながら一緒に快適な生活を作り上げることです。この短期集中講座では、社会福祉施設や在宅において高齢者や障害者への総合的な介護活動が実践できるための基礎的な知識と技術を習得します。講座は 4 日間午前 9 時から午後 4 時まで本校が連携している学校でその学校の先生方による授業を行います。また現場実習では福祉施設などに行き高齢者や障害者に対する実際の援助や看護をしますので福祉に対するしっかりした意見をもっていることが大切です。

履修要件 特になし

(神奈川県立 A 高校『社会福祉実習入門』シラバスから)

3. 実施状況

本学における受け入れ人数、講義、技術の演習は表 1 のとおりである。

講義・演習を計画するに当たって、看護の概念や

1) 川崎市立看護短期大学

表 1 本学における「社会福祉実習入門」の実施状況

		平成17年	平成18年	平成19年	平成20年
高校の ねらい	目標	社会福祉施設や在宅において、高齢者や障害者への総合的な介護活動が実施できるための基礎的な知識と技術を習得する。	同左	同左	同左
	内容	ベッドメイキング、排泄介助方法、衣服着脱の援助、運動・移動の援助、福祉用具の活用などの技術を習得するとともに、そのために必要な基礎知識を学習する。	同左	同左	同左
人数	参加生徒数	1年生：0名 2年生：9名 3年生：1名 合計：10名	1年生：6名 2年生：4名 3年生：7名 合計：17名	1年生2名 2年生3名 3年生4名 合計9名	1年生 2年生 3年生 合計6名
日程		4日間	4日間	4日間	4日間
実施内容	基礎看護学	担当：4名 ・ベッドメイキング ・ボディメカニクス ・更衣（和式の寝巻き） 担当：今泉・谷山 ・足浴 ・手洗い	担当：2名 ・ベッドメイキング ・ボディメカニクス ・更衣（和式の寝巻き）	担当：2名 ・ベッドメイキング ・ボディメカニクス	担当：1名 ・ベッドメイキング ・シーツ交換
	成人看護学	基礎看護学と合同	担当：2名 ・足浴 ・手洗い	担当：2名 ・手洗い ・更衣	担当：2名 ・手洗い ・体温 脈拍血圧の測定
	老年看護学	担当：2名 ・模擬高齢者体験 ・車椅子での移送練習	担当：2名 ・模擬高齢者体験 ・高齢者疑似体験セットを使用 ・高齢者役、介助役を行なう ・視覚障害 ・車椅子での移送	担当：3名 ・講義 足もとから固める介護予防 ・高齢者疑似体験	担当：3名 ・講義 足もとから固める介護予防 ・高齢者疑似体験
	精神看護学	担当：2名 ・コミュニケーション ・相互理解の講義と演習	担当：2名 ・コミュニケーション ・相互理解の講義と演習	実施せず*	担当：2名 ・コミュニケーション ・相互理解の講義と演習
	母性看護学	担当：2名 ・沐浴 ・新生児の洋服の着せ方 ・オムツ交換 ・妊婦の姿勢と動きについて	担当：2名 ・講義 女性について ・性周期について（基礎体温など） ・PMSについて ・飲酒・喫煙について ・STDについて ・演習 ストレッチング、つば ・ハンドマッサージ、アロマ	担当：2名 ・妊婦さんの身体の変化 ・新生児の沐浴演習	担当：2名 ・妊婦体験 ・新生児の沐浴演習
	在宅看護学 （地域）	担当：2名 ・福祉用品を使つての食事 ・家庭でできる介護用品	担当：3名 ・福祉用品を使つての食事 ・家庭でできる介護用品	担当：3名 ・福祉用品を使つての調理と食事 ・家庭でできる介護用品	担当：2名 ・福祉用品を使つての調理と食事 ・家庭でできる介護用品
	小児看護学	担当：2名 ・身近な材料を使つたおもちゃ作り ・だっこや授乳の方法	担当：2名 ・子どもと遊び ・おもちゃ作り	担当：2名 ・子どもと遊び ・おもちゃ作り	担当：2名 ・子どもと遊び ・おもちゃ作り

対象、方法について全く知識のない高校生に、看護技術を通して「介護活動が実践できるための基礎的知識と技術」の理解を得るための内容を検討した。看護技術は人間の日常生活行動を支えるためのものであるから高校生自身にとっても身近なものである。例えば、歩行する・身体を清潔にする・食事をするなどについて看護の各領域の特徴的な技術を選んだ。本学で学習する4日間を各領域で分担し、本学における実習室や機材、シミュレーター等の教材を活用し、臨場感のある学習の場となるよう工夫した。技術を学習する際には、何故この技術が必要か、具体的方法の根拠が説明されたうえで実際に生徒が実施した。

生徒の参加人数は平成16年度の17名から平成20年度の6名へと減少傾向にある。生徒によっては1年次及び3年次の2学年にわたって参加していた。

講師は基礎看護学、成人看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学、在宅看護論それぞれの領域から1～3人ずつが担当した。

基礎看護学・成人看護学では、手洗いやベッドメイキング、ボディメカニクスなど、看護する上でどのような場合でも必要な基本的な技術や、身体の清潔や排泄の援助などを内容とした。生徒が手洗い終わって清潔になったか否か手洗いチェッカーを使って確かめたり、実際にボディメカニクスを相互に体験した。老年看護学では高齢者の疑似体験セットを使い行動の不自由さや苦痛を体験した。また、介護予防など高齢者に特有な援助を実際に体験し、その必要性を理解した。小児看護学では、遊びが子どもの成長発達に重要であることをふまえ、生徒自身でおもちゃ作りをした。母性看護学では思春期にある高校生の特徴を考え、女性としての自分、男性としての自分を見つめること、また妊婦ジャケットにより妊婦体験をしたり沐浴用人形を使用して沐浴を体験した。精神看護学ではコミュニケーションや相互理解をテーマとして実施している。在宅看護論では自宅で療養している方の生活に近い設定の和室の家庭看護実習室を使い、車椅子での調理や麻痺の

ある状態を想定して食事を摂る体験をした。

Ⅲ．生徒の感想

シラバスでは対象を在宅での障害者や高齢者の援助と限定しているが、小児や母性を対象とした看護についての講義や演習をも含め、各看護領域全てを網羅して行っている。さまざまな発達段階にある対象を知ることや特徴的にみられる状況をふまえた体験をすることにより、相手を知ることや相手の立場に立つことへの手がかりが得られた。生徒自身が体験することで相手の不自由さや苦痛を実感し、援助したいと感じ、思いやりを持つことの大切さに気づいている。また、看護技術については、根拠を学び具体的に実施してみても自分の不足に気づき専門的な技術を学ぼうという意欲に結びついている。

平成 20 年度参加者の学習終了後の感想文から内容の意味を損なわないように要約し、疑似体験・技術・

全体の感想の 3 区分に分類し検討した。(表 2)

Ⅳ．倫理的配慮

感想文を分析するにあたって本研究の目的、研究参加は自由意志であること、匿名性を守ること、本研究以外に使用しないことを口頭で説明し、対象者の承諾を得た。

Ⅴ．考察

現在行われている高校生への『社会福祉実習入門』は、各看護領域の教員が専門とする領域から高校生が理解しやすいと思われる内容を選び、主体的に指導している。「介護活動が実践できるための基礎的な知識と技術を修得する」という目標に対し、看護学の分野から学習することの意義と課題について考察する。

介護活動が実践できるための基礎的な知識と技術

表 2 本学における学習からの学び・感想

<p>疑似体験</p> <ul style="list-style-type: none">・相手の不自由さがわかる。・体験することによってその人に何をすればよいのか考える機会になった。・困っているお年寄りの方をみかけたら手助けしたい。・高齢者体験で眼鏡をつけて買い物体験をし、目があまり見えない、小銭がわかりにくいことがわかった。・自身が体験するまではその人の気持ちもあり奥まで知ることができなかった。・いろいろ体験し、体験することに意味があるとあらためて気づかされた。・高齢者体験をしてお年寄りの方は「ここまで耳が聞こえにくい」「目が見えにくい」ということをわかることができた。・こんな大変な思いをしているのかと思うと今まで以上に助けてあげたいという気持ちになった。・沐浴はすごく腰が痛くなり、父や母がしていたかと思うと両親はすごいなと思った。・高齢者体験や妊婦体験などを通して相手の立場に立って相手の気持ちになってみる事ができた。
<p>技術の学習</p> <ul style="list-style-type: none">・シーツ交換をして、すこしのシワだけでどのような影響をあたえてしまうのか学んだ。・病院で「どうしてこんなにシーツがきれいなんだろう？」というナゾがわかった。・子どもについて考える機会がなかったが、病室の子ども達のおもちゃを考えるとこのも初めての体験だった。・実際に実習をしてみると患者さんへの思いやり、声かけを忘れていた。・体位変換は声かけがぜんぜんできず不注意な点が多かった。・コミュニケーションは看護する上でとても重要で大切なことだと思う。・今回学んだ技術を活かし活用していけたらいいと思った。
<p>全体の感想</p> <ul style="list-style-type: none">・実習を通して一番思ったことは、相手の気持ちを考え、行動する「思いやり」である。・介護と看護は、相手の復活を支援する立場として同じではないか。・今回、経験したことでやっぱり「誰かの役に立ちたい」「助けてあげたい」という気持ちが大きくなった。

とは、援助者としてのあり方を基盤にした具体的な実践方法とその根拠を学ぶことである。介護の定義は社会福祉、介護福祉及び看護等さまざまな立場から定義が試みられている。日本社会事業学校連盟・全国社会福祉協議会連合会の社会福祉実習のあり方研究会の定義によると、介護とは「老齢や心身の障害による、日常生活を営むうえで困難な状態にある個人を対象とする。専門的な対人援助を基盤に、身体的、精神的、社会的に健康な生活の確保と成長、発達を目指し、利用者が満足できる生活の自立を図ることを目的としている」¹⁾と述べられている。看護においても専門的な対人援助が基盤であり、身体的・精神的・社会的側面から総合的に把握して日常生活行動への援助をする。また、両者とも、専門家として援助するためには相手を理解することから始まり根拠のある援助を提供することができなければならない。生徒の感想からは、学習を通して、相手の対場に立つことの大切さや思いやりを持つことの大切さが挙げられた。高齢者疑似体験などにより日常的に何気なくしている行動のなかで苦痛、不自由さを実感したことからこのように表現していると考ええる。また、手洗いの必要性やベッドメイキングにおけるシワのないシーツの意味などから思いやりだけにとどまらず、苦痛を軽減したり感染を防ぐといった看護技術の根拠について考えることができた。『社会福祉実習入門』シラバスに「さまざまな援助技術や介護は対人サービス」であること、「高齢者や障害者と関わりながら一緒に快適な生活を作り上げる」と述べられている。介護は対人サービスであることや一緒に生活を作り上げることとは援助する人と援助を受ける人の「対等な関係を築くこと」によって成り立つ。相手の対場に立つことは相手の身体面の苦痛や感情をも体験によってイメージしやすくなり対等な関係へ近づくことができる第一歩であったといえる。

福祉分野における介護においても、看護分野においてもその人の生活へ働きかけることが重要になる。川島は介護職と看護職の専門性について次のように述べている。「生活とは人間の暮らしや暮らし方を行い、経済的な営みを視野に入れて食料や生活資料の調達をはじめ、調理、洗濯、掃除等を含む行為の継続、ならびに社会の最小単位である家族との人間関係の複雑な過程である。この生活を維持しととのえる面で専門的に働くのが介護職である。」²⁾と述べ、看護という生活行動への援助を「生活行動は社会的な存

在としての人間の生活を視野に入れつつ個別の個人の生命を維持する日常的習慣的ケアをいう」³⁾と述べている。また、太田は生活障害への介護の役割として「第一に日常生活に関わることを固有の業務とし、しかも長期的に、継続的に日常生活に関わる職種である」⁴⁾と述べている。介護の技術は生活そのものに視点を向けることが必要であり、看護技術はその人の生活を成り立たせている行動そのものを援助することが大きな比率となる。他方、介護技術について小池は、利用者との援助関係を築く基本技術として「気づき」や観察の重要性を挙げている⁵⁾。また、観察の視点としてヴァージニア・ヘンダーソンの基本的看護の構成要素 14 項目を「利用者の生活全般を支援するという役割を担う介護従事者は、この 14 項目にあるような広い観察視点を心がけ日ごろの業務に関わっていく必要がある」⁶⁾と述べている。このように介護技術と看護技術とは共通の視点もある。本学における学習で生徒が看護技術を学習することは介護活動を実践するための基礎となる技術を修得する機会となった。しかし、日常生活行動への援助の体験という点で介護実践に必要な日常生活に関わる技術の学習には到達していないといえる。つまり今回生徒が学習したのは生活を支えている一つ一つの行動そのものへの援助であり、介護において必要な生活に関わる援助のための技術の一部分であったといえる。そして、介護の核となる日常生活に関わるという意味と、シラバスにある「一緒に生活を作り上げる」という観点から社会福祉施設実習による現場での利用者との触れ合いがより深い学びを得られると考える。

今後の課題としては、高齢者体験・妊婦体験など、援助する人と援助を受ける人との対等な関係を築くという点と介護に結びつく看護技術を学習するという 2 点に焦点を絞りプログラムを構成することで効果的な学習ができる。また生徒は本学における学習の後、社会福祉施設へのボランティア体験を実施するので、技術の学習が役立っているかどうかの確認が必要である。

VI. 結論

現在行っている方法で『社会福祉実習入門』の学習をすることは、日常生活への援助という点で共通するので意義がある。反面、介護に必要な技術を学ぶという観点からは実際の利用者の生活に触れる体験の方が効果的であると考えられる。

また、『社会福祉実習入門』の学習を選択した生徒は看護職や「看護」と隣接する分野（福祉）の職業を志望していることが多いため、看護についての理

解を得る機会を提供することは保健医療福祉チームの協働にとって意義がある。

文 献

- 1) 一番ヶ瀬康子監修. 介護福祉学とは何か. ミネルヴァ書房. 1994. 259p.
- 2) 川島みどり. 看護の技術と教育. 勁草書房, 2006, 254p.
- 3) 川島みどり. 看護の技術と教育. 勁草書房, 2006, 254p.
- 4) 太田貞司. 利用者との援助関係を築く基本技術. 介護福祉士養成講座 11 介護概論. 新版第 3 版. 中央法規出版, 2006, p.68-77.
- 5) 小池妙子. 利用者との援助関係を築くために. 介護福祉士養成講座 11 介護概論. 新版第 3 版. 中央法規出版, 2006, p.64-68.
- 6) 小池妙子. 利用者との援助関係を築くために. 介護福祉士養成講座 11 介護概論. 新版第 3 版. 中央法規出版, 2006, p.64-68.